もっとやさしい開発経済学

連載 第2回

貧困をもたらすもの

高橋和志

開発途上国では、多くの人が貧困に苦しんでいます。最近の世界銀行の発表によれば、一人一日当たりの生活費が一ドル（購買力平価換算）に満たない極貧層は、途上国人口の約一九％にも達すると見積もられています。そのうちの約四分の三が農村居住者です。今回は私が主に調査対象としている東南アジアの農村を例に挙げながら、貧困層の生活とはどのようなものなのか、貧困の原因とは何か考えていきたいと思います。

●農村貧困層の生活

はじめに、農村の貧困層のイメージを共有するために、フィリピンで出会ったある家族の例を紹介したいと思います。

この一家には六人が同居していました。世帯主は四五歳の男性です。ご主人は小学校卒業後、田植えや稲刈りの手伝いをして収穫の一部を分け与えてもらう、農業労働に従事してきました。農業の端境期には、道路建設など日雇い労働を行い、一家を支えています。奥さん（四二歳）との間には、三人の子どもがおり、長男（二三歳）は、中学校卒業後、首都のマニラでバイクタクシーの運転手をしていましたが、現在は村に戻り、新しい職を探しています。長女（二一歳）は中学校を卒業してから、しばらく働いていませんでしたが、わずかなお金を元手に、一年前から野菜の行商を始めました。彼女には別れた旦那との間に授かった二歳になる女の子がいます。仕事を始めるようになってからは、お母さんが孫娘の面倒を見てくれるようになりました。中学生の次女（一五歳）は、将来、看護師の資格を取得し、海外に出稼ぎすることを夢見て、勉強に励んでいます。

自宅は、ご主人の両親が暮らしている敷地の一部を相続して建設された、木造トタン屋根の一軒家です。家にはテレビと鶏が数羽いる以外にこれといった資産がありません。一家の収入は、お米の現物支給など全て足し合わせても一カ月一万円前後です。一人当たりでは二〇〇〇円に及ばず、一日に換算すると、わずか六〇円程度です。時々、ご主人の両親がお金を貸してくれるので、それを日々の生活費にあてて、ようやく何とか暮らせるようでした。

食事は一日二回、主食であるお米やトウモロコシと少しのおかず（魚や野菜）を家族で分け合っているほか、クリスマスなど特別な日には、庭先の鶏も食卓にあがります。しかし、家族は慢性的に栄養不足で、中でも肉体労働をしているご主人、食べ盛りの長男やこれから成長していく女児には、毎日の食生活は決してやさしいものではありません。家族の誰かが病気になることは、それ自体悲しいことですが、働き手を失ったり、高い医療費を払わなくてはいけなくなったりする場合には、一家の生活をますます苦しめることになります。

●農村貧困層の特徴

この話は一例に過ぎませんが、農村の貧困層が置かれている状況には、この一家と似通った、ある程度共通したパターンがあります。まず、農業所得を十分稼ぐほどの土地が全くないか、あるいは少ししかなく、労働力が主要な生産手段であることです。農業以外の職業から十分な収入を得ることができればよいのですが、教育水準が非貧困層よりも低いことなどから、収入の安定

した非農業賃金職を得ることは困難です。そのため、家族が持つ貴重な労働資源を、農業労働や参入の容易な非農業労働、時には街への出稼ぎなど多様な生産活動に振り分け、それぞれから少しずつ所得を得ることで生計を立てています。このやり方は、特定の産業部門や地域経済に、突発的非常事態（例えば干魃や不況）が発生した場合にでも、一家の収入がゼロになる可能性を低くするための生存維持戦略として、欠かすことのできないものです。

生計を立てる手段が多様な反面、定職を持ち、平日朝から晩まで働いている人と比べると、貧困層の労働総投入量は必ずしも多くありません。これは、貧しい人たちが怠け者だからではなく、基礎的な栄養が不足し、体が弱いためにたくさん働けないか、または、働きすぎることによって、体を壊してしまうことを恐れているのが主な理由として考えられています。先ほどの例で言うと、ご主人が無理をしすぎて仕事ができなくなったら、一家の収入は一カ月五〇〇〇円にも満たなくなってしまううえ、薬代や医療費の支出もしなければいけなくなれば、食事の量をさらに減らすか、次女を休学や中退させざるをえなくなるかもしれません。働き手が病気を患うことにより、家族全員がさらに飢えることや、娘の夢と貧しい生活から抜け出す可能性を同時に奪ってしまうことはできるだけ避けたい、そのために体を酷使しないという予防策をとっておくという、合理的な判断の表れと言えます。

それでも避けることのできない不測の事態に備え、自ら貯蓄をしているケースはよく見られます。しかし、その額は決して多くありません。土地や家畜資産もそれほど多くないので、それらを担保にして銀行からお金を借りたり、売却して資金の融通を利かせたりすることもほとんど不可能です。そうした時に頼りになるのは、家族や親戚などの血縁関係で結ばれている人たちや隣人など地縁関係で結ばれている人たちと構築する社会的ネットワークです。極貧層の中には、社会的に疎外・隔離され、それゆえに心理的にも苦痛を強いられている人々もいますが、より多くの貧困層は、冠婚葬祭や村の儀式への参加等を通じて互いの結びつきを強め、困っているときには、お互い助け合いながら生活をしています。

●貧困削減に向けて

これまでの話から推測されるように、農村における貧困の直接的な原因は、所得創出に有効な生産手段の不足にあります。ほぼ唯一保有している労働力は、栄養不足や不十分な教育によって、低生産性を余儀なくされます。また、自己貯蓄が少なく、資金借り入れの際に必要な担保資産も保有していないために、それが長期的な所得向上に役立つとわかっていても、投資を行うことが困難です。貧しいが故に所得を増やすための投資が十分に行えない結果、貧困から脱却できない悪循環がここに存在します。

このような悪循環に対して、どのような方策をとれば、貧困に苦しむ人々を救うことができるのでしょうか。これまでの農村貧困対策では、農地改革などを通じて、豊かな者から貧しい者へ直接的に資産移転政策を行い、貧困層の所得創出能力を高めることが指向されてきました。しかし多くの国々では、地主の強い抵抗があり、農地改革は失敗に終わっています。最近の研究では、教育や医療サービスへのアクセスの改善、職業訓練などによって、貧困層の労働生産性を高めること、道路などの基礎的な社会資本整備を行い、農村経済と都市経済の結びつきを強め、農村を活性化させること、そして、貧困層の投資可能性を高める信用機会を拡大させることの重要性が強調されるようになっています。

ただし、これらの処方箋も必ずしも万能ではなく、地域固有の制度状況やそれぞれの貧困層が抱える特有の問題に対応したものでなければ、期待されるほどの効果は上がらないかもしれません。

開発経済学は歴史が比較的新しく、発展途上の学問です。これから、様々な貧困事例について、研究が蓄積されていくことで、貧困削減のメカニズムがさらに明らかになっていくことが期待されます。

（たかはし　かずし／アジア経済研究所開発研究センター）